



絵の具は何からどうやって作るの

昔は、色のついた土を使っていた

ほら穴などでくらししていた、昔の人は、かべにいろいろな絵を、かき残しています。その絵を調べてみると、赤や黄色、黒などの、色のついた土を使って、絵をかいていたことが、わかりました。いちばん初めの絵の具は、色のついた土だったのです。また、燃え残った木の先の炭や、動物の骨を焼いた炭で、黒い絵をかいたりしました。

自然の中には、色のきれいな石や、貝の殻、卵の殻などがあります。昔の人は、これらを細かくくんで粉にし、油やにかわの液でとかして、使っていました。

今でも、自然の石を原料にして作った、「岩絵の具」を売っている所があります。しかし、自然のものは、そうたくさんないので、量には限りがあります。

顔料に、いろいろなものを混ぜて作る

今では、ほとんどの絵の具は、工場で、人工的に作られています。顔料という色のもとに、油や樹脂、にかわなどを混ぜて、練り合わせて作ります。ほとんどの顔料は、石油を原料にして作られます。樹脂は、木の幹から出る液が、固まったものです。また、にかわは、動物の皮や骨を、水でにつめて作ったものです。

油絵の具は、顔料に乾性油や、樹脂などを、混ぜ合わせて作ります。乾性油は、空気にふれると固まる性質のある、植物性の油です。

水彩絵の具は、顔料にアラビアゴム、はちみつ、グリセリンなどを混ぜ合わせて作ります。グリセリンは、脂肪や油から作る液体です。

また、日本画をかくときの絵の具は、顔料に、にかわを混ぜ合わせて作ります。

(監修・青木 国夫)

